

下三栖城跡の発掘調査

調査期間：令和3年 7月7日（水）～ 8月6日（金）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 下三栖城跡について

下三栖城跡は、現在の下三栖集落につながる中世の遺跡です。下三栖庄を前身とし、室町時代に幕府の家臣で横大路地域を拠点としていた横大路被官衆の一人が築いた城館跡だと推定されています。

江戸時代には主要な家々の周りを堀がめぐる景観を呈していたと考えられ、三栖神社の周囲には今も東西方向の堀跡が残っています。

2 発掘調査について

今回の発掘調査は個人住宅建設に伴って行いました。調査地は下三栖城跡の北西部に位置し、周辺道路から1m以上嵩上げされている土壇の一端に位置していました。直前まで明治頃に建築された家が建っていたため、新しい時代に壊されることなく良好な状態で地層が残っていることが推測されました。

下三栖城跡の推定範囲は、1986年京都大学の山下正男氏によって初めて提示されました。山下氏が参考にした江戸時代の村地図には「土居藪」という記載があり、土居や堀があったことが伺えます。平成19年試掘調査では推定範囲内で堀の一端が確認されました。その後京都市が大正11年測図・昭和10年修正の京都市土木局都市計画課作成3000分の1図に残る水路痕跡をもとに詳細な復元図を提示しました。平成29年には推定域内南西部で発掘調査が行われており、中世の水田と近世の蔵・柱穴などが検出されました。この調査では近世前期の洪水以降、人為的な盛土による嵩上げによって現在の地形が形成されていることが確認されています。

3 今回の発掘調査成果

今回の調査では高台の上で江戸時代の建物を確認し、南に向かって下がる現地形の段差部分には堀が廻っていたことが明らかになりました。高台は洪水砂を1m以上盛って構成されており、その最上部は三和土によって丁寧に被覆されていました。検出された堀は何度か掘りなおされていました。また今回見つかった堀は大正時代の地図に描かれておらず、個別の家々を囲う網の目のような堀が廻っていた可能性が出てきました。

以上から下三栖の集落が中・近世を通じて洪水の度に災害復旧し、地盤を嵩上げて洪水対策をしながら現在まで営まれてきた様子が伺えます。

下三栖集落の南端に位置し村の鎮守社である三栖神社は由緒も古く、当地が古い集落であることがわかります。幾度も災害を乗り越えて人々が住み続けた下三栖の集落は、京都近郊の村落の重要性と逞しさを我々に教えてくれます。

(赤松 佳奈)



図1 三栖神社北側に残る堀跡

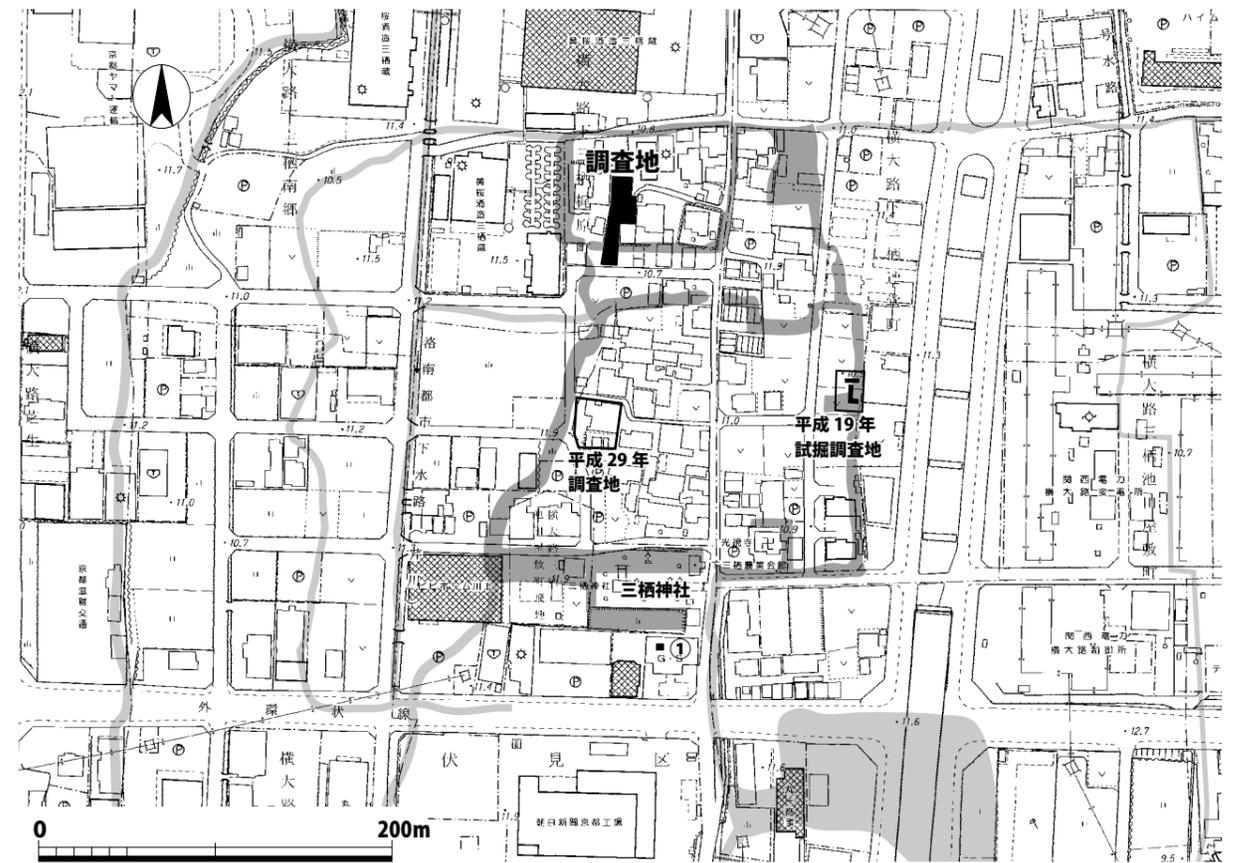


図2 調査位置図



図3 全景写真 北から

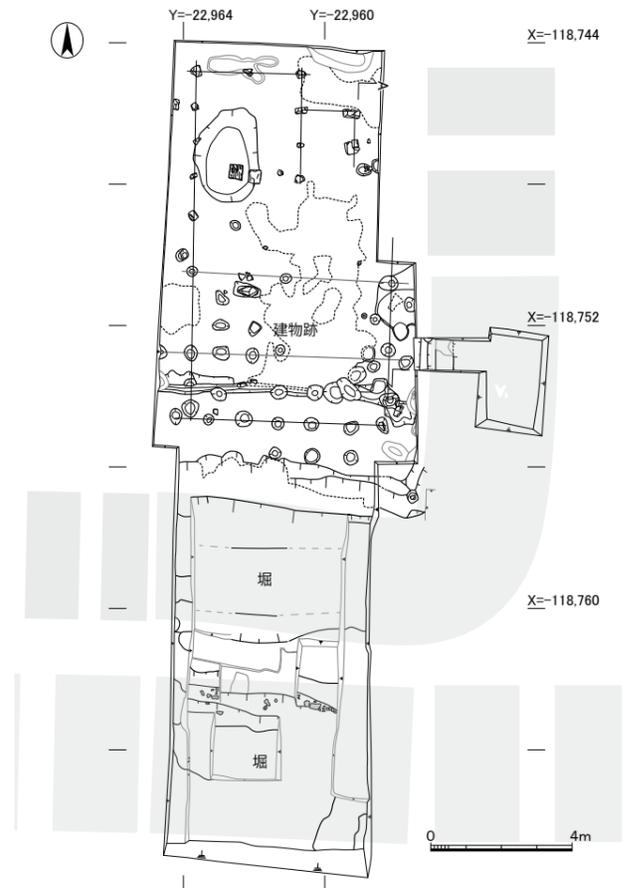


図4 遺構平面図